俳諧十家類題集

夏

中村俊定文庫
文庫 18
711
2

俳諧十家類題集夏之部

○目録

四月　更衣　初袷一　袷　白重　青簾
青嵐　灌佛　花御堂　佛生會　花摘　山王祭
加茂祭二　加茂祭　葵　挿　競馬　大神楽　麦秋
麦の穂　穂麦三　牡丹四　廿日竹　葵　芥子菱
一つ茎　杜若五　卯の花六　卷卯木　餘花　若楓
茎七　紫　青茎八　茂り　茎搦　新樹　夏木立　相の花
柚の花　花柚　搦の実　蟻　椿　簾の実　夏山八
夏野　夏竹　若の花　岩蘚　筝九　蓼

蔭　雲老鶯　郭公十　雨鼓鳥　蝙蝠十六　飛蟻

袋角　蚊　初鰹　多情　故張十七　蜘蛛囲　初鰹

うぢかく　うぢかく　ちとく十八　雀鮓　鮎　鱠　短夜十九

夏夜　明やすく　一夏　夏書　夏の日　五月

端午　菖蒲　摺蒲　根合　菖蒲酒　菖蒲花

菖蒲湯　粽　甲冑　粽甲　懸　印地

薬玉　五月雨廿二　五月雪　竹植　竹酔日　虎う雨

初蟬　雪喜入　田植　早苗廿四　早苗取　早乙女

田仲取　真菰　真菰苅　薄　簾　百合

早百合廿五　南天巷　きう島　花菖　紫陽花　合歓

合歓花　皐月雨　皐月雪　蚕搦　搦　雲見仲

枇杷の実廿六　青梅　若竹　萱仲　茨菰　紅の花

石菖　忍冬巷　苏子　新麦　血の巷廿七　凡守

于瓜　雨蛙　ほそ長廿八　蚊帳　とうろう　蝸牛廿九

なめくじ　鳴巣　鳴巣　ゝ切　水鶏　黒鴨

鴨の子　青鷺廿九　鳩　啼　鶏　鮎　鯢

蟬　川狩廿一　照射　夜ゝ　夏川　夏の風

鯀　小鯀　きひゝ　一重蔵　夏衣　夏の月廿五

夏の海　六月　氷室　氷室使　一夜酒　醴

冷酒廿六　茨酒　冷汁　祇園會　不二詣　御稜廿七

夏越　夏神楽　天満御稜　芽鰯　施米　雷

暑廿八　夕立廿九　洗鯉　土用干　虫干　虫拂

蠶　扇　麻頭巾 卑　團　切水　夏座敷

簟　竹婦人　箒　麻　枕　納涼 卑　涼し 卑　風薫 卑

六月雪　六月郭公　蚊いきれ 卑　汗拭　雨乞　旱

雲の峰　清水 卑　河簀　干飯　水飯　冷麦

あれ籾 卑六　葛あり　振舞ひ　氷あり　心太　林檎

涼しき　石竹　蓮 卑七　河骨 卑八　澤浮　風車

海松　風蘭　麻　綿花　香薷散　真菜丸 卑九

瓜畑　夕顔　蚊帳 平　蟬　蟬衣　蟬の殼 平

空蟬　夏虫　蠅　蚤　沖鱠　夏瘦

撫香 平二

俳諧十家類題集夏之部

八十坊　輯校

四月

更衣

衣がえまつ風を学ぶ蛍かな　芭蕉

汗のいろる茶行くそ衣文　希因

蔵後屋うきぬぎ寄や衣之　其角

法然も高の下茶や衣文

ゑ蕉も なるるとつゝて衣之

塗笠の裏ニ日なりるの衣　嵐雪

ぬぎすてゝ日なりるの衣之　来山

中村俊定文庫

初袷

皆てけるを宮こそ衣こそ　麥林
衣ぬ袷の人ぞふ白し　蕪村
辻雪よりの人のぬぎ袷し
衣を帯ぬ雪ぬ
大無の世ぬ袷ぬ
袷ぬ世ぬ家中ぬ
痩揚の毛ぬ緞子ぬ衣
浅ぬ討の妻ぬ
衣袷ぬ
古袷抱えのぬぬ　芭蕉

袷

揚を袷ぬ揚ぬ袷ぬ　嵐雪
袷出せ花を袷ぬ　来山
ぬ朝を袷ぬ雪の帰り雪　言水
大風ぬ袷ぬ雪ぬ袷ぬ　其角
一つ袷ぬ袷ぬ
掲のぬ袷ぬ
ぬぬ袷ぬ袷ぬ　蕪村
袷ぬ袷ぬ袷ぬ　希因
袷ぬ袷ぬ袷ぬ　嵐雪
袷ぬ袷ぬ袷ぬ　希因
袷ぬ袷ぬ袷ぬ　嵐雪

白重
青簾

青嵐　嵐雪

灌佛　麦林

灌佛や乳をそそぎぬる盃　其角

灌佛や捨る別寺の児　希因

灌佛や小僧の指を酒の烟

花御堂　麦林

七堂よりあまりて余る茶湯堂

佛生會　其角

麦飯や明うそうせて仏生會

苞菓子の唐びくやく佛生會　言水

花　摘　麦林

子ぼうしや行人を見の母

山王祭　言水

山法師の糸おもく巻うらう

加茂祭　其角

琴をちの大宰より大路邪

加茂祭　言水

葵艸うるをとしも牛の角

葵　摘　蕪村

なのりそのうらの車をてらす

競　馬　嵐雪

いもせ山加茂の俤今幾日

太神宮　言水

きの神宮宗祇よ係屋の苔も法

麦　秋

葉よ麦よ麦より金うらの紅葉哉

麦の海風を傳りて雲

雲士郎てうをとる麦畑と

秋去しぬきうもふしし爲麦

雲の麦蒔り年を知るや

麥の穂

穂麥

麥の穂や雑化堂麥ほ〳〵傳をふるる事
麥の穂や麥とうん書こて〳〵 嵐雪
麥の穂や風よりの生麥を抜をふと
麥の穂や村の麥ふるう
麥の穂やおさまんせる麥ぬるる 希因
麥のふやし添り添ぬるる芭蕉
麥の穂や穂麥の中の車 蕪村
麥の穂や麥屋穂麥をふるう殘して
狐やいつて河内の麥畠

牡丹

牡丹麥ばかりを系をうしして穂素
麥一穂拾ひ出ほそんう邪 沾德
村雨や蹴出をたるこの一 其角
牡丹の穂ぬるるこの邪 芭蕉
牡丹の穂ぬるるこの邪 ″
牡丹の穂ぬるるこの邪 ″
八ちをとうたるふるうん邪
猫の恋ワをとるの咲ぬるる 希因
恋の麥ふるるこの包むほそんうる
麥の穂ぬるるこの邪 嵐雪

出尊てあふいだ白い牡丹哉　嵐雪
古庭にかりまたるゝたんぽゝかな　、
鎖おろし人のこゝろや牡丹畠　麦林
眠る猫それでも豈ぼたんかな　来山
そのゝ人を消ぬべし牡丹哉　、
牡丹切て気のおとろひし夕かな　蕪村
寂として客の絶間の牡丹哉　、
地車のとゞろとひゞく牡丹哉　、
ちりて後俤にたつぼたん哉　、
山蟻のあからさまなり白牡丹　、

廿日草
葵
葵の露

閻王の口や牡丹を吐んとす　、
ちりて打かさなりぬ二三片　、
広庭のぼたんや天の一方に　、
菜とゝもにかくれてたれ昔艸　芭蕉
をとなしき鏡やぼたん艸　言水
うし島ある庭の須弥いくら山　其角
菊の宮翔鶴遊の洞をこゝろ　、
蜂て割る睨も花や蓮の露　麦林
葵咲て嗅なるけしき葵ていそうらん　来山

一ツ葉

扶長

[illegible]　蕪村
[illegible]　沾徳
[illegible]　芭蕉
[illegible]　沾徳
朝[illegible]　言水
かき[illegible]　芭蕉
紫の[illegible]　其角
扶[illegible]
篠[illegible]
[illegible]

[illegible]　嵐雪
かき[illegible]　希因
[illegible]　麦林
遍照[illegible]
折紙の[illegible]
深[illegible]
[illegible]　来山
[illegible]　蕪村
[illegible]
[illegible]　芭蕉

卯の[illegible]

[illegible] 芭蕉

[illegible] 沾德

[illegible] 言水

[illegible] 其角

[illegible] 麦林

[illegible] 希因

[illegible] 其角

花卯木 [illegible] 嵐雪

餘花 [illegible] 言水

若楓 [illegible] 其角

[illegible] 来山

鞠姫 [illegible] 希因

三年寺 [illegible] 楓 燕村

高低 [illegible] 沾德

村雨 [illegible] 素堂

又見 [illegible]

[illegible] 其角

年を[illegible]しるしけれども　其角
[illegible]風や[illegible]の[illegible]　嵐雪
本も艸も八日なをるるるる　来山
[illegible]とるるやし花の[illegible]
他人の衣も脆るるるるる　希因
[illegible]切[illegible]　蕪村
絶頂の[illegible]
[illegible]
[illegible]の[illegible]
[illegible]

青葉

[illegible]
交代の[illegible]　初桜　其角
[illegible]　沾徳
[illegible]
[illegible]の人の[illegible]　希因
[illegible]　嵐雪
新樹
[illegible]
[illegible]
[illegible]　其角
[illegible]　嵐雪
[illegible]の羽も[illegible]　希因

菱木立

桐花　蕪村
柚花　其角
茶柚　沾徳
搖實　言水
藪椿　蕪村
蔦實　素堂
莫山　芭蕉

菱野　蕪村
菱草　素山
芡花　布因
居蔦　麦林
筍　其角

[illegible]の箏を[illegible]　其角

箏よ什よりおくるだらん、

井の底を折命なりしみ月哉、

井乃ゐやしうう寒の床に隅うも　嵐雪

そらけのるゆ以の蓬ゑの哉なり、

井のるにそるそ世八ゑ二　日　沾徳

井のるゆ吟ゆう皮を枕ゑ行　来山

そそそるる情ゑ箏ゑるれ、

うそうとるゑの雪ゆ井の中、

什のるゑそそそうなれて什ゑ垣、

琴

箏の義乃葉内やおとしさし　蕪村

そそそのそゆ物の法ゆう寺ゑ、

るふうそそ琴物ゆ本のそそる　其角

砂川ゆ或ゑ琴と流を翻ん　蕪村

ゑのゑゆえゆそそそそそ琴の面、

卯の義のそ月そ義の廣寒哉、

琴ゆ什のる義そ老成なく　芭蕉

ゑそそそ吟ゆそんの吟ゆ什、

吟ゑ友撥ゑゆそ上、

ゑそそそ大井ゑを深月哉、

義

琴老峰

新ゑ

一夢の行ち横ふふや　鄙ろ　芭蕉

ほとゝぎす聞む月を梅の花さそふ

牛ろん寝てまつの子線鄙ろ

爲鐵妻の寿終て仏と変

下駄ろらてなるほゝくやを鄙ろ　沾德

見ぬ世まてと月や伽る鄙ろ

思ふのうゝのゝまくまを行ゝ変

山畑のうゝてゝ行ゝふ夫

ゝゝゝいまゝ神ゝ行ゝ変

さうゝゝ山ゝ鄙て出て社字

この章表紙ゝまてゝ時ゝ　言水

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

おゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

人ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

流ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

鄙ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

山ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

梅ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ　素堂

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ　其角

陸の反ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

傾廓

寮坊をのぞき侍しに時雨
ふる山村の日暮や時雨
せなる中ふるさと所うれ
る雨の面紅葉ほ[illegible]
ふるとていうほど傘成雪もう
る紅葉やし嵐ふ[illegible]
あるそそけ稼多り太鼓時雨
あまを鶯まうもて詠ら
あれ寄りて吟ふ[illegible]
浪乗中たもこうあ[illegible]

其角

雲をちうあ寺よ鬼ま[illegible]る紅
あ[illegible]よ京二寄ソ[illegible]れ出る非
川[illegible]ひそう屋敷てう時雨
紅[illegible]彼時を竹の戸
我勾人ふれ[illegible]を[illegible]
屋中下るの折ふ[illegible]
夜遠星[illegible]
[illegible]
鶏鳴中[illegible]
時の紅雨を待[illegible]

[illegible]二の指乃表明しる　其角
郭ら中へまてのとなれしる、
草のうへやしたる初雪を隠若ら、
ちり〳〵や世をはなれしや時鳥、
[illegible]人のつくるかな、
さもしく本発句ふ[illegible]、
阮咸ら三味線ら時ら、
[illegible]人を弟ら雇ふ者ら、
月の上ら国をこく人や[illegible]、
砂ら月ら雇ふを後へ郭ら、

郭て[illegible]紀を帝[illegible]紀、
[illegible]ら[illegible]て西[illegible]梅や時ら、
六阿弥陀ら[illegible]て明[illegible]時ら、
[illegible]ら[illegible]ん[illegible]、
月清て猫掛け風呂や郭ら、
[illegible]幟[illegible]、
時ら[illegible]ら小竈ら郭、
人ら四月[illegible]、
五篇ら[illegible]、
[illegible]て[illegible]時ら、

袷のやつれて帰るやわかれのつゆ　其角
うかれる姉は一人かへりしきのふ　、
なにしきやうつしかへりし袖の秋　衣　、
籠の鳥の母をこふなくつしの声を　、
又も衛れかうらうちふ手に晴る　、
木とゝきれ雨も猶降まさる酒ますかき　、
実ありやし竹や玉に箕ははるけて　、
時雨きけるを庭の梧桐のかげ　嵐雪
似たる紙衣はきてひけはしまれ　、
行終を月のあすせむかしとそ　、

ふくきは飯のさえかゝ所付ん　、
錦帳の鶴世を州の戸や蜀魂　、
立花を吟ておりしかれし遊　、
うき路きて松杉斗なきしきは　、
宗の下の画竜のうへぬ時雨　、
ほしよ鴻や利休の茶室　、
あらしや老の山の木の下露　、
ならしよれ団子里さん盛寺よ　、
酒飯御いてつるとら紙ふく遊　、
再会てる肩絵のころや浮き世　希因

希因

来山

麦林

時雨降る時雨降る時雨降る　蕪村

[illegible]、

[illegible]、

[illegible]、

言水

[illegible]、

蕪村

[illegible]、

[illegible]、

[illegible]、

かんこどり

[illegible]、

[illegible]、

[illegible]、

芭蕉

言水

其角

[illegible]、

[illegible]、

麦林

蕪村

蝙蝠

足跡を字にもよまれずかんこ鳥　蕪村
合歓の露こぼし杣とや寂しさる
憂つくれ鶴の稚き蔵やしらぬなる
山人の寂しさ寂しさなるかんこどり
かんこどり梅のえだにも鳴てゐるに
寂しさる寺見る因素林るとやいふ
かんこどる可もなく不可もなき音かな
啼きて又なるを常やかんこどる　希因
蝙蝠の屋もてらされ蔦葉　其角
うち見し字治の橋しや一□□

亥　十六

飛蟻
袋角
蚊

かはほりの物ふかしくも樹ふかな
蝙蝠や向ひの女房こちを見る　蕪村
飛蟻とぶや富士の裾野の小家より
ふくろ角まつられ初まり鹿の角　芭蕉
蚊の声のしづかなる新の雨　沾徳
蚊の夜も蚊をころす八重の夜　其角
蚊やりして蚊をいぶしける音の息
蚊をころし川や蚊もする寺の鐘
蚊柱は蓑の渡りしてゐるなり
ちり毛の蚊は昔しむや足痕思

[illegible]　其角
[illegible]　来山
[illegible]　蕪村

初牧牛
牧牛
牧牛

言水
嵐雪
其角
言水
来山

[illegible]　蕪村

協岡
初鰒
うを平

其角
芭蕉
素堂
其角

人のさとさんにあそしに行こうとする　其角
帆をおろを毎ちこうかう孤うくれ、
こうこうかう乃跡を已日の夕去ぬ、
るる毎とこうふうやしきんさ紙、
揚貴妃の去こうを活こる鮫こう毎、
大邸の中く一年こうかうこうる　嵐雪
こうこう孤こうの名を着てこうこうる　其角
飯鮫の鮫こうこうこう紀如こう郎、
こうこうにこうこて鮫ぬこうこもる鮫ぬ　蕪村
到こうこて鮫をこうこうの遠行こる、

雀鮫
鮎鱠
鮫夜

こうこう桶をこうこうぬこう樹下に座ぬ、
鮫こうこうぬこう座根の鮫ぬこうこう風、
夢のこうを出こうとせ雀鮫、
こうこう鮫ひきこうの川岸鮎鮫、　芭蕉
鮫ぬこう朝日行るの納屋汁夢　其角
こうこうぬこう隣こうこう塩の豆、
庵の衣こうこうかくこうぬこう　嵐雪
鮫ぬを二湾こうこうこう上こうこう柴　来山
こうこうぬこうこうこう麻屋式出たる、
鮫ぬこう里の行る栗のこうこん　蕪村

うゝこう秋や伏見の庶民の　蕪村
秋やゆ毛ゆ一の上の雲の雲
ゝしこう秋や一つ咲て志賀の花
秋や平国人流の川　〃
うゝこう秋や小人世明る所ゝれ
秋や平ゝてゝるゝちゝゝ銀屏風
うゝこう秋やいゝゝ移ゝる小松ゝ
秋や平芦乃扉ゝ鱸の　泡
うゝこう秋や二人義行大井川
秋やゝを眠ゝてゝる平家　丸

芝夜

うゝこう秋やゝるの脊中かゝゝ　希因
夜のあ秋ゝ歩屋ゝゝる蛾ゝる　芭蕉
夜のあ山のあゝゝ山ゝ育ゝ山ゝ　言水
夜のあを吉次ゝ冠者ゝ恨ゝる　其角
なゝ山のあゝ森ぬゝ疝気の部ゝ
明安夜　明安ゝゝあゝかゝゝゝ東山　蕪村
一芝　夜百日墨ゝゝぬゝ俤ゝ彩
芝書　月ゝゝゝゝ教ゝ茅の夜ゝ
俤深のゝゝゝゝゝゝゝゝ　其角
芝の日　なゝ山の月ゝ蛾ゝ銘のゝゝ　嵐雪

○五月

端午　一カ月ぜんけの中先の九　節　嵐雪

さつき尾の中なかなる菖蒲

菖蒲　けの中先ふく法村山まれやけの法り物　沾徳

ふるさとの屋根ふかと葺くふるけの中先のなる　来山

我門をあの中先一ロ香　一　用　其角

撫佩　撫佩てふとさとそうしやしを者　嵐雪

根合　根合やし沾徳ふかれ　笆　其角

菖蒲煮　沾徳のふかく乾くやけの中先煮　麦林

菖蒲　菖蒲と共に鍵の法くふけの中先井　其角

垂のけの中先ふとやし菰の鍋鍋　嵐雪

菖蒲ふかけうふの法のあ年ふる　其角

苧つくしタつとふえて菖ふる、

菖　切ふえふとひふとうう花けの中先、

ふむしう坊ふふまやし花　嵐、

茶菖のふくもうねるけうし井、

菖蒲湯　法やしふの沾ふ坊ふ法ふ　ろ　来山

粽

沼の霧の雨の中　其角
朝湯の後の涼しさ　言水
ちりしをや粽くてもの葉　門
芦間の雨の雫をこぼす粽
粽結人に行くや妻　芭蕉
ちりぬらん駅よりえて粽の香　其角
竹の戸やいつまで草のこひ粽
而生ひ毎もあるて粽　希因
ちまきにあるらんの竹落　嵐雪
みもすくは上もなし粽の把

甲飾　麦林
粽甲　其角
のかぶり　来山
彩甲人よりはるとなるかぶり　沾徳
大鍬を生ぬ好もまねく蛙
潟の竜ちらちらと降はり
本ひしをいけぬるの鍬　言水
なるの甲のと信ぬ鍬　其角
疱瘡の涙を遠るのかぶる
鍬の沖ちる米の抵ひ

印地　来山
菜玉　嵐雪
五月雨　言水
　　芭蕉

五月雨や柏の葉いつまでそ
　　、
見れば蓼くゝみ月あり
　　言水
不二の月ちやくちやくとして六月雨
　　沾徳
さゝなれや情ふかふの絶
　　其角
五月雨やて芳野を出ぬ夜し
　　、
隅田川舟こゝて行ふく五月雨
　　、

三位殿の紅りをとゝ五月雨
　　、
菊本やしん人ゝ五月雨
　　、
新ぬゝ五月田のとゝとゝ五月雨
　　、
行くゝもとゝ流れの長ゝ五月雨
　　、
ゆくゝれや湯の種ゝ山ゝ焼ゝ
　　、
菖ゝとゝくゝとゝ五月あめ
　　、
五月雨やしられぬ人ゝ
　　、
ゆくゝれや海ゝ五月ゝ物ゝ
　　、
五月雨やし傘ゝ小人所
　　、
さゝなれの名ゝ名せよ帝ゝ
　　、

五月雨や不二の燈の手伝ふし　其角

五月雨や振舞の通ひ縞の尾　嵐雪

にくまれや夜網ふる角ふくし、

五月雨の塔居ふるまを枝とふる、

にくまれや玉ゐの鶏さまる日まて　希因

五月雨や板のとてひとり板、

書ふるもこゝ文の塔ふる雨し五月雨　其角

五月雨や佛の手を拾ふ色　蕪村

にくまれや大河をあゐ家ふる、

ふるまふる雨ふるの寄ふなるにまり、

五月雨の大井誠しふるかしふる、

小田ふて今羽雲ふふふる、

流へ不ふを戻ふ皐月雨、

にくまれのふりかは拾ふ毎、

行をふるふふん明ふむ五月雪　其角

行捨て世後ふふ日　秋亭ふる　沾徳

ふふふふも井捨ふ日ふ義ふ笠　芭蕉

雨ふふ行も辞ふ日の人の法　其角

八ふふ糸ふふふふふ屋為、

ふふ蟬ふ角ふ袋を十ふ宝、

皐月雪
行　独
行酔日

雨ふ雨
物　蟬

雪吹こゝろと入けり〳〵こゝ日し　嵐雪

田植

風流のこゝろ〳〵名や更け田植うた　芭蕉

田一ぱん植てうたる杵の音　〃

合羽ゝてなくなくさし田植うた　其角

田植うたてあつまりとる角田川　〃

麓ゆて帰る田うへの男の音　蕪村

ろくろの新人合て田うへの音　麦林

早苗

早苗も我うつ苗日数の音　芭蕉

うつて行やゝ苗の縄尋乃長　言水

皆〳〵空やゝうつうたるうたの門　其角

物所の早苗植よ生る姿をなぐめ　希因

早苗取

植てゆくまも稲葉や早苗うり　言水

早乙女

早乙女の足よ行えの後の音　希因

早乙女やうるの後うく植てけり　其角

早乙女ゆうくらく蛙さよ　言水

田植女能因後乃手くさうり　来山

早乙女やしらぬ人ぬ手くさうり　其角

田舞取

焼塩の背中ふけし田舞うり　沾徳

さい蔵

うまくふうるうたる孤よ石よ古墓　蕪村

さゝ屋孤苔

ゑ浮〳〵利鎌ゆうたる孤の列

蓮　麦林

蓮や竹や今朝を白玉の露を咲く

蓮葉や大公望の釣を咲く　希因

蓮や紙をくくるを釣て居る　其角

蓮葉のくるやしけられて月を宿む　蕪村

蓮巴の刈藻花咲寺のあれ　素堂

百合　希因

百合の新も赤るやし百合のくる

早百合　蕪村

早百合をとうれ正業

仮初をあり生けくり谷の庵

南天忘　麦林

南天忘

南天忘　其角

南天忘　来山

南天忘　蕪村

紫陽花　嵐雪

合歓　希因

合歓の新も合歓の咲ける　蕪村

合歓花　沾徳

皐月花　麦林

[illegible]　言水

魚摘　花摘ふくなちらり　桂

摘　旬に志さく宮さく佐度さく　其角

[illegible]

樗

[illegible]　蕉村

雲に舟　[illegible]　芭蕉

枇杷の実　枇杷の実　[illegible]　言水

青梅　[illegible]　蕉村

若竹　[illegible]　麦林

[illegible]　箱根山　其角

[illegible]　素堂

[illegible]　蕉村

蓋物　[illegible]　来山

[illegible]

芝菊　[illegible]　其角

[illegible]　芭蕉

紅花　[illegible]　其角

石菖　其角
恩冬云　蕪村
苏子　其角
新麦　希因
瓜花　嵐雪
　　芭蕉
　　蕪村
　　言水

瓜守　言水
于瓜　芭蕉
雨蛙
螢　言水

牧方より笠のうちくちるる　沾徳
ねぶるぬの紬れうち這てゐるる　蕪村
ゆやうくるる紅の穴と咲るる　素堂
あつ家わるるる小ら雀やらん　其角
ちとせをこのわるるれ行るし、
川隈やしまふこそれわるる　姫、
舟のうちより我を笠ゑ咲るる、
笠ふりてこうれてこそ咲るる、
世解てを行を哀まぬるる、
義ゐして釣くふるるる　嵐雪

蚊遣

笠の穴のひくちよ蚊ゐるる　希因
雷やまの社くるる切て蚊ゐる、
家人行のふるる中とくく天の糸　来山
蚊遣用を屋ぬるるほるる糸　蕪村
蚊遣て家ゑてわん竹　芭蕉
うるるくの井ふ家を高蒲簾　来山
蚊帳ゆ業ゆ有のかやりる　其角
蚊をやく中ふ中ふる方ゑ家　猶、
蚊をやく中麝蚊の国の杉流、
蚊やうるるゑ夕兵衛ゑ行を、

あれにけりかみなりの後蝸牛哉　嵐雪
蝸牛木やしきに女の泣さけり　、
夕立の雨にちひさく蝸牛哉　希因
三井寺に物人の蝸牛の姉　蕪村
かたつぶりして糸ひく程のうれしさや　、
垣越て墓の隣へやりし庭　、
生まとよれとうけて人を渡りけり　来山
養ひしの角や譲りし蝸牛　素堂
枇杷の葉や見られて角ふる蝸牛　其角
年たぬ気の耳やかゝり蝸牛　、

やくさ名
蝸牛

蝸牛何のこゝろに小意地かな　、
名のみえて世に住ぬる蝸牛　、
文七は踊る庭のうらかな　、
鎌倉やむかしの角のかさねたり　、
志ら露や角に目をもつ蝸牛　嵐雪
てらむしやその角のしけり宝出　蕪村
簾うちて雨のしづくやあまだれり　、
蝸牛の住家しみやらけ世貝　、
あともなくて葉の葉なかりけり　麦林
肉川や鴫の浮巣まなく蛙　其角

なめくぢ
鴫巣

鴨巣　素堂

鴨の巣や二の上るゝ伊勢の海

ゝ切　言水

しゝ汐の世や帰ゝ峰花

鶴　芭蕉

雪ふるゝ鶴も寒しと鳴ける

あらけなき紙衾寒しうちる鶴　其角

鶴鳴くゝ赤まに移りの鶴

琴を焼くゝ鶴を煮る沢潟　蕪村

冥の戸々鶴の寒さうらうらと　沾徳

黒鴨

黒鴨や能て寒を帰る月夜

鴨の子

鴨の子や芦の葉毛羽揃

青鷺

久ゝ鷺や青鷺の脛をうち

鵜峠　下ゝ鵜や姫柳の下く枝こえ　其角

鵜

鵜ゝ仕ゝて一里ハ来ゝ家の和

鵜ゝ鳥の不ゝらゝ鳥ゝ鳥ゝ

剣ゝ鵜ゝ鵜川ゝ　言水

鵜ゝ仕ゝ鵜流ゝ鵜川ゝ　蕪村

夜ゝ鵜ゝ鳥ゝ鳥ゝ鵜川ゝ

ゝ鵜ゝ鵜飼ゝ

ゝ鵜ゝ鵜ゝ

鵜ゝ潜ゝ鵜をのうれる恵泊

西ゝ鵜ゝ鵜ゝ鵜ゝ鵜ゝ鵜ゝ射ゝ

鵜ゝ鵜ゝ　芭蕉

鮎

鮎ながし自ら[illegible]おりく[illegible]とり　芭蕉

鮎汐や松の葉うつる夜の雨　沾徳

鮎を釣て[illegible]てるてる坊主の門　希因

鯢　蕪村

鯢[illegible]ふるさとうらの鯢の縞　芭蕉

うれ舟の浄しき中へ懈の甲　其角

川狩

川狩や橋上の人の足ぶり新　蕪村

月よ對さ君よ夜網の舟　〃

川うら中[illegible]帰[illegible]

成長く左京かさせう松蛸　言水

照射

星川や物音遠くて坊主のる　来山

[illegible]て秋[illegible]敷よく魚のとりしる　嵐雪

[illegible]月後の月[illegible]　蕪村

なつ川を越を始しさよ[illegible]

[illegible]風や移ぬうそみるうの魚

鯀

鯀のもむもを刈[illegible]　来山

小鯀

[illegible]や[illegible]　沾徳

[illegible]　其角

[illegible]　沾徳

[illegible]　其角

[illegible]

夏衣

きぬぎぬの袖をかさねて夏の夜　嵐雪

を食をる天地を忘るなり衣　其角

雙月

月をいとをとなをの中うしゝ後の夜　芭蕉

月つきもうめうらにて中を無愛、

夜の月清神うなて命拾中、

夜の月蚊を寝うして入一四面　其角

雪ふ入月中ふ冷うを富士のふ、

いれの月ふ行物うそうれの月、

消て面く家ふ伏ふ中夜の月　嵐雪

ふの夜しいふるも行ふる月　来山

夏九十五

玉絃のうをの月あ中ふ玉擽、

堂ふるの小ふなれれふの月　蕪村

めうをうれの消流うる中ふ月、

あれうる雲人の夢中ふ月、

河ふの夜ふる夢中なれの月、

ふ行うう行手うんなれの海　言水

ふ中ふ面ふ月入ふのうを　来山

夏九十六

○六月

氷室　六月の密林ふせうう氷室　言水

禁ずる所も深さうなる山　麦林
氷室かうおとのゆや　新さて
氷むろ山星霜のふるゝ日数哉　其角
新さを見ぬ深さうなる氷室山　希因
氷室供
一杯酒　百姓の寄る神事　一杯酒　言水
法師ふ宣給ふ　一杯酒　蕪村
酔
酔の世界もそゝ　菊根山
冷酒　芝居を陶淵明ゝ　言水

夏酒　夏解や暖かの抱　多
冷汁　ひやけるうたる宵戸の世林　来山
紙屋奉　紙屋金平きゝ奉京の風ふる　蕪村
きゝん平　俗の訪ふる桃の堂
月待や　素丸西へいるに世海　沾徳
待よ　そゝる人のゝ　其角
そて白もうり　鶴平紙屋奉　嵐雪
氷室　氷室の家ゝ平　其角
冨士行平　細代ゝ　友の家

不二詣

法板

角帽子のさゝ洞むれ不二指　素堂
押形とて三絃新式や法板川　沾徳
年も子羊い流るゝ法板川　素堂
芸板法印の古れそうろう　其角
ひくゝゝと紙屋でとと海法板　蕪村
夕こゝろ鳥ゝゝと嶽川　嵐雪
ゝゝゝゝ目の紅ゆや法印高
ひくゝゝの海鼠法ゝて芸板、
冬の夕ひ小肖井流ゝや交板　蕪村
出ものの加茂ゝ松ゝゝゝ板、

芸越　大井川ゝゝのゝゝ燈ゝゝし　言水
芸神楽　神ゝ井ゝ法ゝゝ交井楽　蕪村
燈ゝゝ法ゝ芸神楽　其角
新祭ゝゝ法ゝゝの芸ゝ芸神楽　来山
芸ゝゝゝ不のゝゝゝ芸燈　言水
天海法板　蕪村
芸脇
施米
雷
暑
明ゝゝ法ゝ松ゝゝ芸ゝ　蕪村
ゝゝゝ自ゝ晴ゝ　鮫の蓋　其角
小女の帯ゝゝゝ擬の手の乃乃夕目ゝゝ　素堂
鳥兎鉾のゝゝゝのゝゝ　其角

供うこの鞘の暑さや暑の松　其角

人よりこと暑に思ふ捨ふ矣、

毒暑て取れのそく雪の氣、

暑さ冷の本紙て通る暑る、

小紙う影の痛のけいさいな、

澤深のふうるあいさうる　嵐雪

雪けてそうも暑て海り上、

いうさ日やうるの仕事の風も涼　希因

音信や欲さうく汗なる　来山

汗流よ衣の脊絵の白うるう　其角

夕立

物居して暑るを避る暑て形　蕪村

暑よ日の力ようる扇の郷、

居うるる毎る痛くの暑る、

日暮うの左山城るけうるる形、

夕立や被も挿ず欠出も　希因

玉雨の中うる清て流る山　素堂

夕立や内後ようあ清み　其角

雲の雲も夕立うる脇し、

夕立や海を出ずる風雲、

夕立うるけうるる、

ゆふさらや法花堂　其角

夕ゝやゝ四ゝを遠りの秋すゝき

中ゝさらや雲のうかゝる女ゝ

夕ゝゝゝ雲のゆく時ゝ鶴

四日の月夕ゝゝの時ゝ来山

ふるゝやゝ茶屋とゝる俤沙　其角

ゆふさらや雲のうかゝる俤沙

夕ゝゝやゝ雲ちのこゝ水仙の

夕ゝゝゝ枯沼の葉ゝ匂ふる

中ゝさらや洗ひ鯉ゝ土用干

夕ゝさらや山の松ゝ水の流ゝ

中ゝゝゝ陰ゝ　嵐雪

白山や門松ゝ人ゝゝ　蕪村

夕ゝゝゝ枯ゝ雲ゝ鳥ゝ

石日の月ゝ雲ゝ　其角

山路やゝ麻ゝ洗ひ鯉　素堂

ゝゝゝゝ森ゝ扇ゝ似る土用干　其角

おもゝゝゝゝ土用干

嫁入せゝ時の枕も土用ゝし

旅人やゝ本州ゝゝて土用ゝ

洗ひ鯉

土用干

虫干　むしはむと杉本の小竹子もとり　其角

むしぼしや蜘の傾城と東大寺　蕪村

書紙干て竜と孫寐の鄭うる　沾徳

虫拂　樟紙の代をゆるふの陰る　其角

蓬生に年ふるもぬを出るむし

蠶扇　法の声むすれ蠶の崖う邪

ものとなりて扇の裏陰ものとる　蕪村

麻改巾　ものとしてものとる陰る

法しの竹のうるものうるの

ものとなり麻や紙の陰る麻巾　其角

板きものとり挿笠うら笠うう邪

掬をるるんて乾る母や ぬる笠　沾徳

惜嗜や本の小しる笠ものう

ものとの風情見る閑る　其角

ものとの笠のものとの不ひう邪

ものとものひのうちて面うん竹の汁　蕪村

陰笠のそれも清十長るむる邪

ものうてや拾もものえもぬるる行　其角

山もるるるるの入るるやしるる笠

ものの邪の笠の芭蕉　芭蕉

簟

ものの邪の笠の簟や　簟

仲秋人

蓑枕　其角
納涼　蕪村
蓮や しけつゝ表をすゝうむし　其角
弓矢の帯の神さびたるも　蕪村
神殿の夕風ふるふ蓮の葉
抱蓑や妻あうてさの夕今日　其角
汗の枕を風ぐ〳〵ぶ蚊帳俳　嵐雪
磨屋さかしく新笑よ仲間人　蕪村
涼〳〵や芋もぬれ笠　枕
夕涼み奴〳〵や湖の行〳〵舟　麦林
引神も涼〳〵と敷の宮ゐ　言水
彼風ひら〳〵日新や箔ろ夕涼　芭蕉

勢田夕照

粥菊　女や茶屋よりあるる枕もとゝ　沾徳
切箔の四条ほとゝぎす外
ゑと羽の合せ少〳〵形や夕涼　其角
夕さゝやよくて男よ生れさう
此人数ゐられてもてゝ
新ものゝ川あるうせてもみぬ　希因
ゑの人の手と探すや枕もとみ
此毋ゝ ゑるはうゝみもと矣　其角
涼みの泥あり合〳〵遊てう那
詩〳〵あるよ朝紀を森夕生〳〵

義う家后星こう川きの流こうる　其角
大山の後らぬ秋をとゝゝゝる、
牛なけむをの歯こゝゝやけ流こ、
涼しさの蝉てけもうるる人、
ちれやしゝゝゝ雨滅せ人下ゝゝゝ、
川ゝゝゝゝ鳥ゝ後ぬるゝうゝる、
千ゝゝゝゝ田のゝゝゝ行て涼ゝ　麦林
酒ふうけゝゝゝゝゝゝゝゝる　其角
勢小雨の月おゝゝめしゝゝゝる、
此雲ゝゝ風ゝ屋ゝゝ美、

能をゝゝて叩ゝゝゝゝゝゝ、　嵐雪
大ゝ迎け大を長ふ夜のゝゝ、
見ふゝの三位星ゝ孫のゝ　来山
夕ゝゝゝゝ夕ゝゝゝゝ　麦林
月出てゝ夜ゝゝゝ涼ゝ　其角
ゝゝゝ眼のゝゝゝ空ゝ涼ゝ　来山
ちゝゝゝゝ蛍ゝゝ家涼、

涼しさや猫を四ゝ猫を四ゝ猫ゝ　其角
新今ゝ猫ゝゝゝゝゝゝゝゝ　来山
ゝゝゝてゝゝゝゝ肩ゝゝゝ

懐紙

涼

川底のふくみ流るる清水の涼を掬ふ　蕪村

掬ふを涼をこぼすと的なる　嵐雪

きしもとの水に月のうつるもの色　〃

よしの山の月の雲をうつす夕涼　蕪村

羽衣の天をたゆたふ行涼　〃

鶴ゆけば中に鶴行涼し海涼し　芭蕉

ひかりつる月に雲をうつす涼　〃

山きしの家ふく湖のうす眼うす　素堂

きしもとの坊をこ人のうたれ髪　来山

京洛の一月ぶきを笑ふ那　〃

きしもとの中に人民義みて流涼　其角

海をうつして涼む角ぶえ　〃

夕茶碗をうつしよう鶴の折る　〃

涼しさや帆を外さぬ船のうち　〃

陸を外さぬ涼しさ　〃

涼しさにむ安房や上総の海　〃

芝浦の夕しほ涼の水をうつす　〃

きしもとの中に人民義みて流涼　蕪村

涼しさや海をうつして月の雲　〃

上下と涼の間をうつす　其角

[illegible]　嵐雪
[illegible]
[illegible]　麦林
[illegible]　芭蕉
[illegible]　其角
[illegible]　素堂
[illegible]　蕪村
[illegible]　言水
[illegible]　其角
[illegible]　蕪村

風薫

露涼し
六月朔日
菓のいとれ

[illegible]

汗拭

[illegible]　其角
[illegible]　嵐雪
[illegible]
[illegible]　蕪村
[illegible]
[illegible]　其角
[illegible]　沾徳
[illegible]　其角
[illegible]
[illegible]　希因

雨乞

[illegible]

旱

[illegible]

清水

来山

麦林

蕪村

佐徳

紀伊国の清水

其角

嵐雪

蕪村

二人してもとくを酒に浸すこゝろ　蕪村

寒食てきやうのれるに浸すこゝろ、

石工の琴を聞くこゝろ、

門美姫徳利もちたなれる　其角

物もむなよ麓の稲雪に浸す、

雲ゆるるとかくせむる羽織　嵐雪

河豚の瀑布冷麦の九条に飛ぶ　其角

水飯　冷麦　あの形

河豚の形やしらしかくれ住む　蕪村

河美　干飯

あの形のさめくなる仲の唐、

宇陀にて昔人大唐の郷、

葛城山を浦人大唐の郷、

振舞の　水の　ささ

山陰を一房なる水の下白道　其角

四絃にて弱のきりけやさしさ、

明神のうる本の宋やいやしく、

ほとゝぎす逆しまに沼河こゑ　蕪村

ゆるるも林檎を物て面白し　其角

林檎　ささ

うるかさ　芭蕉

石仏　麦林

石仏の堺を四町のうち半歩　沾徳

魚屋通りの籬いさむる冬ごもり　素堂

蓮

繁字沼沈の蓮ひらたくひ、る、

我蓮枯て一株の平ぶりする、

清ふかき水に出る風清ること、

一茎清て毋て青葉の蓮、哉

清ふかき水に出る風清ること、

宗うしとこそ思ひ侍り　己斗

宗うしとこそ思ひ侍り　言水

ふるゆきの中に新ぬるもいろ〳〵の蓮

なるこ多ひ毋いまこいろ〳〵の蓮うる哉

行くうれひ蓮よ俗よ蓮の沈　沾徳

蓮の葉中に因を仕付るの浅

人〳〵をのむ蓮の沈の蓮

蓮の葉乃赤鐸もうゆく裏邦　其角

蓮てらく蓮てはそふ朝ちくを

出ぬ茶屋よ散うれても蓮う哉

沈坂の新くまちの蓮てう哉

丈白ふ仏と思ふ蓮の赤　希因

蓮花や しら雲とても 土の 秋　麦林
涼しさの 蓮の 濃淡 ふれ、
白蓮を きらんとて 白伯のさま　蕪村
蓮の 香や ものをとらるる 蓮二寸、
汚れの うつくしさ 蓮見哉、
蓮ものも 白の 蓮の うつくしき、
河骨や 孤の 蓮 ひぬ 蓮 素堂
河骨や 抜う 泥 抜う 抜 平 楽　嵐雪
からかさを 降く 罷る 雅 麦林
川かねの こ の 蓮 の 舟　蕪村

澤瀉　おもだかや 矢 の 花　素堂
風車　牛の 夢 ちらつく 風車　希因
海松　波 ちらつく 貝 出 海 を 蜜 ら　其角
海松の 香 の 抜 の 岩 や 初 海 山、
ちらつく 香 や 汐 越 を 風 の 孤 る 雲、
海 ちらつく や かつ ちらつく ちり 尼　嵐雪
風蘭　風 蘭 や ふ を ふ て 一 柄 杓　麦林
麻　夕文略　いらく 村 や 家 を 陣 る 麻 車　其角
いらく ちらつく 淋 人 ちらつく 麻 蓬、
ちらつく や 麻 の 花 の 麻 畠　蕪村

綿弓

香薷散

芭蕉瓜

瓜の皮むいて蓮そうめん　形も
ちさき瓜の皮にて作りたる香の味　沾徳
芭蕉葉うつくしきもいのちまた
瓜の皮あるものてうつ流れうつ　其角
うつくしむて猿丸太夫の墨さ郭
瓜の皮笠をきてとかさうつ

素堂
其角
芭蕉
沾徳
其角

瓜畑

夕新

母の母やまた又法いとしたまを瓜
咒のうめ　嵐雪
うつくしうつくしう晴よ　其角
なつかしの法華のうつくしの瓜
伝ふうつくしうつくしうつくしう　蕪村
瓜ゆかの月やまたは法華
古寺やうつくしう今瓜たつ　来山
まつくしうつくしの松さうせまつ瓜もつけ　蕪村
夕ふやし物をいつくしのうつくしう　芭蕉
夕西やし西の新垣根　其角

夕ゝふや一日孫を花の宿　其角
まてるやし我をを恋て牡ひねと　来山
夕ゝほや垂のゝてゝてゝ　希因
まてるほのゝゝゝ石形ゝゝゝ　麦林
夕ゝほの竹燈寺のまつゝる　蕪村
夕ゝほの花蓮む猫や余ゝ　、
まてるふや芝ゝゝゝゝゝ　、
蛍ゝほの子ゝ形ゝ養ゝ　芭蕉
子ゝ作ゝまゝゝほゝ花むゝ　、
ゝゝの神ゝゝゝほゝゝ伏蓑哉　言水

蟬

蛍ゝほや猫のいとゝんゝめる形のひ　其角
ゝゝほゝゝ此ゝ蛍の三十里　蕪村
ゝゝりゝゝゝ出ゝゝゝ入坂の影　芭蕉
ゝてしぬゝゝゝゝ坂の影　、
峠ゝゝ坂ゝゝゝゝ下り坂　沾徳
坂ゝゝゝゝゝゝゝ墨ゝ指ゝ郎　其角
傳ゝゝ付ゝゝゝ坂ゝ蛍のゝゝ　、
せゝゝ紙ゝのけ一日ゝて赤の影　、
井ゝの坂ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ　、
祝ゝ彼蟬ヲ蛍者ゝ衣をぬゝ事と　、

飯櫃のうちもそこぬけ蟬の声　芭蕉

下駄ぬし地蔵の蟬の声　嵐雪

いなづま雲をはなれて蛍の声　蕪村

大佛のひざ宮殿せまるあつさ

半日の涼を掬ぶ蟬の声

せみなくや僧正坊の声ばかり

蟬なくや行者のるすの刻

蛻る西の枝も蛍の小川哉

蟬衣　芭蕉

蟬殼　其角

見灯のうとうとかれし蛍の殼

空蟬　京せみくさ　吉弟子みく作弟子

蛻虫　友ちの碁ゑうれうれ金ゑ

蠅　蠅打やこう敷ひをなをし　華言水

うんとうの蛙ちれ名ゑ風俗　其角

蠅ちちちと恕ちゑ侍ゑ朱ち　嵐雪

新ちゑ侍ゑ飯粒蠅ちいちちち

ちいいちゑ友ちゑ侍ちゑ雪ゑ新　蕪村

雪侍ちゑ蠅打蠅ちゑちゑ新

切ちゑちゑ侍ちゑ乃ちゑ孫

蛻ちゑちゑちゑ雪ゑ人の雪ち

雪

沖鱠

やれさらしやしきにみえかへれ猫嫌　来山

沖鱠ちらし景や浅漬しけり　言水

夏痩

ゑりやせり破間ちゝとゝ小倉也　其角

うつり香

かけ香や唖の娘のひとゝなり　蕪村

うつり香やしのぶとしれる人の袖ゝゝ　〃

掛香や何よのぞくまる蝉衣　〃

俳諧十家類題集夏之部終